

柳田國男と高見山の伝説

—旅行と『日本傳説集』の影響—

はじめに

大正五年（一九一六）四月初旬、関西を旅行中の柳田國男は、同七日に奈良・三重県境の高見峠を越えた。途中、柳田は地元の男から伝説を聞き、五月の『郷土研究』に「高見山近傍の口碑」として報告する。旅の経験はその後も回顧され、このとき抱いた着想は昭和四年（一九二九）『日本神話伝説集』の山争い伝説の解釈に結実する。本稿は柳田の高見越えの状況を検討し、旅行が伝説解釈に与えた影響を示す。

一方、「高見山近傍の口碑」は、大正二年（一九一三）の高木敏雄『日本傳説集』にふれる。同書の分類・配列を見ると、柳田の着想に通じる発想がある。柳田の解釈は、高木の発想と旅の経験から展開した。本稿は高見山の伝説について、その解釈の源流をたどる。同時に、従来注目されなかつた個別の伝説研究について高木の貢献を指摘する。これにより、日本の伝説研究史にあらたな知見を加えたい。

一、山争い伝説と柳田の関西旅行

（一）『日本神話伝説集』と山争い伝説

昭和四年（一九二九）の柳田國男『日本神話伝説集』（後に『日本伝説』と改題）は、児童書ながら伝説の成立、類型、信仰との関係といった柳田の伝説論の要点を説く概論書である。同書は、弘法伝説、片目の魚伝説など様々な伝説を扱うが、今もこれらについての参考文献とされ、研究史上、重要な役割を果たした書物である。本稿は、柳田の山争い伝説の研究を考察するが、この伝説も『日本神話伝説集』に収録されている。

「山争い伝説」とは、『山と山、あるいは山の神や支配者同士が争つた』という伝説である。類話には、『争いの結果、山の一部が飛び、付近に特徴ある地形ができた』という展開がしばしば付随する。⁽¹⁾

『日本神話伝説集』は、「山の背くらべ」「神いくさ」の章で

齊
藤

純

各地の山争い伝説を集成し、共通した型の存在を示した。また、
①山が成長するという古い考え方、②左右に山を眺める人々の発
想、③故郷の山への愛着、④山の神への信仰、⑤地域の靈山で
あること、⑥山頂に石・草鞋などを持参する風習、⑦石・土・
草木の持ち出し禁忌といった注意点を指摘し、論評した（柳田
一九九八a 四二一～四二七）。このように、山争い伝説につい
ても『日本神話伝説集』は基本的研究であり、論点は現在も踏
襲されている。⁽²⁾

この『日本神話伝説集』の考察で注目されるのは、「高見山
の入鹿の首塚」伝説の成立に関する解釈である。「高見山の入
鹿の首塚」とは、古代の大化の改新の政変で、飛鳥板蓋宮で中
大兄皇子・藤原鎌足らに殺された蘇我入鹿に関する伝説をいう。
鎌足に切られた入鹿の首が、奈良・三重県境の高見山（奈良県
吉野郡東吉野村・三重県松阪市飯高町）に飛んで祀られたとい
い、このため、鎌足を祀る談山神社の鎮座地、多武峰（奈良県
桜井市）と高見山は仲が悪い。あるいは高見山で「鎌足」といっ
てはいけない、鎌を使うなどという。

柳田は、この伝説は山争い伝説から発展したものと考えた。
彼は『日本神話伝説集』で次のように記す。

伊勢と大和の国境の高見山といふ高い山は、吉野川の川下
の方から見ると、多武峰といふ山と背競べをしてゐるよう
見えますが、その多武峰には昔から、藤原鎌足を祀つており

ますゆゑに、高見山の方には蘇我入鹿が祀つてあるといふよ
うになりました。入鹿をこのような山の中に祀つて置くはず
はないのですが、この山に登る人たちは多武峰の話をするとこ
とが出来なかつたばかりでなく、鎌足のことを思い出すから
といつて、鎌を持つて登ることさへも戒められてをりました。
その戒めを破つて鎌を持つて行くと、必ず怪我をするといひ、
または山鳴りがするといつてをりました。（即事考。奈良県
吉野郡高見村）

この高見山の麓を通り、伊勢の方へ越えて行く峠路の脇
に、二丈もあるかと思ふ大岩が一つあります。土地の人の
話では、昔この山が多武峰と喧嘩をして負けた時に、山の頭
が飛んでこゝに落ちたのだといつてをります。さうして見る
と蘇我入鹿を祀るよりも前から、もう山と山の争ひはあつた
ので、その争ひに負けた方の山の頭が飛んだといふ点も、羽
後の飛島、或は常陸の石那坂の山の岩など、同様であつたの
であります（柳田一九九八a 四二六）。

柳田によると、もとは高見山と多武峰が争い、負けた高見山
の頭が飛んで落ちたという伝説があった。そこへ大化改新や談
山神社に関する歴史知識が影響し、鎌足の対立者、入鹿が高見
山の神に当てはめられた。こうして入鹿と鎌足が争い、負けた
入鹿の首が飛んで高見山に落ちる伝説になつたというのであ
る。

『日本神話伝説集』も紹介しているが、たしかに山争い伝説には頭が飛ぶ話がある。たとえば、肝吹山（伊吹山）と争つた滋賀県の浅井の岡、あるいは富士山と争つた山形県の鳥海山などで、浅井の岡は首が切られ、琵琶湖に落ちて竹生島になる。また、鳥海山は負けが口惜しくて頭を飛ばし、日本海に落ちて飛島になつた。しかし、これらの共通点だけでなく、柳田は、「土地の人の話では」というように、原型になる地元の伝説を提示した。これが本書の解釈に説得力を与えている。柳田は、「どのようにしてこの伝説を得たのだろうか。

(一) 「高見山近傍の口碑」

大正五年（一九一六）五月一日発行の『郷土研究』四卷二号に、柳田は「高見山近傍の口碑」という報告を載せた。これは次のように始まる。

大正五年四月七日、大和と伊勢との境なる高見峠を越ゆる際、荷持ちの男より左の話を聞いた。此者は吉野郡木津川の生れで、二十年程前から同村大字鷺家口（わしづかぐち）に出て住んで居る桶屋（おけや）にして、此頃は人力車夫を兼業する四十余の至つて実体さうな男である（柳田二〇〇〇b 六三）

この中で、柳田は次のような伝説を記している。

高見峠の路の傍のちやうど高見山の登り口に近い処に、大きな岩があつて無数の小石が其上に載つて居るのは搖ぎ石である。斯うせぬと此石が動くと云うて、通行の人が小石を拾つて載せるのである。高見山は多武峰とは敵同士で、此山へ参つた者は多武峰へ参ることがならぬと云ふ。高見様は荒い神様で、首を切られて其首が此山上迄飛んで騰つたとも云ひ、今でも願を掛けると首から上の病はきつと治して下さると言つて信心する者が多い。此外に力を授けて下さるとも言うて居るが、力を授かるのは中々一通りの信心では行かぬらしい。平野（高見村大字）の弥五物（やごそう）と云ふ者などは高見山に願掛けをして力を授かつた人である。（中略）此山に参詣する日は四月八日と八月十五日とである。山は寒いので卯月八日の参詣の時にはまだ何の木も芽を出して居らぬ（柳田国男）

さらに、付記として次の文章を添える。

○此話は出来るだけ桶屋の話した通りに、最も新しい記憶によつて書いてみた。恐くは一度も文字ある者の口又は耳を通しなかつた古伝であらう。此話を聞いた時の自分の興味を書添へるならば、高見山に蘇我入鹿（そがいりのしか）を祀ると云ふ話は久し以前から不審に思つて居たが、是は多武峯が藤原鎌足の廟所で本来はやはり一種の山争ひ譚であつた。入鹿の首が飛んだと云ふ話で思ひ合せるのは、羽後の飛島の伝説である。鳥海

山が富士山と背競べをした時、少しく及ばぬを憤つて頂上が海へ飛んで此島になつたと云ふのである。搖き石を小石で押

へて置くと云ふのも、黒崎氏が常陸紀行にある石成長の話な

どに、石が高さを競はんとするのを憎んで、神が其尖を蹴折つたと云ふの類で、是亦所謂たけくらべ伝説であるらしい。

高見山の姿が最も勇ましく見えるのは伊勢からでも無ければ市辺からでも無く、却つて吉野川下流の五条下市間であることを考へると、多武峰との山争ひを言ひ始めた人民は即ち此辺に住した者であることが察せられる。（中略）山争ひの話は高木文学士の日本伝説集にも幾つか採録せられて居る。

（柳田再記）（柳田二〇〇〇b 六五）

一読すると、『日本神話伝説集』の「土地の人」は、この「荷持ちの男」とわかる。つまり、柳田は、大正五年四月七日の高見越の際、話を聞いたのである。男の生地・住所は現在の奈良県吉野郡東吉野村で、ちょうど高見山の西麓に位置する。この記述は柳田自身の直接の調査報告として興味深く、付記には、『日本神話伝説集』の解釈に結びつく発想が既に示されている。

この峠越えは、『柳田国男全集』第二五巻の解題により、大

正五年四月三日の「丹波市記」と同じ旅行とされている（柳田二〇〇〇b 五四八）。「丹波市記」の行程は、畝傍山陵・櫛原神宮—今井・八木—十市—箸中—柳本—大和神社—丹波市（天理）—奈良と続くが、その後二日間どこかを廻り、四

月七日に高見峠に出たのである。

（三）「旅行の上手下手」

この旅行を扱つた文章がほかにもある。昭和九年（一九三四）五月、「婦人之友」二八巻五号に掲載された「旅行の上手下手」で、末尾に「文責記者」とある。該当部分は「三四年前、まだ自動車が不自由な頃、奈良の帰りに二日の暇があつたので」と始まり、当麻寺—河内長野—觀心寺—千早城址—五条という行程を語り、次のように続く。

それから吉野の上流の鷺家口わしやぐちを通りて—今は乗合があるが、私達は人力車で行つた。更に真直に一里半ほどゆくと、奈良県と三重の境の高見山の横腹に出た。こゝは大変景色のよい所でつゝじの咲てゐるのが遠くから見える。昔、高見山と多武の峰とが背比べし、高見山が負けて口惜しいので頭を飛ばしてしまつたといふ伝説がある。傍に頭だといはれている一丈位の岩がある。その間を杉谷といつて、そこを通つていつた。この杉谷が大和と伊勢の境で、つまり高見山の頭は大和に、胴は伊勢にあらわけである。

その時の荷持が話の多い男で、次々と語つてくれるかうした伝説を楽しみながら、更に一里半ほど歩いて、伊勢の波瀬といふ村についた、こゝからは立派な道があつて、馬車か自動車を利用すれば楽に松坂に出る（柳田二〇〇一一一八五）。

高見峠で「荷持」に伝説を聞いたなど、「高見山近傍の口碑」と同じ旅行とわかる。ただし、本文章の旅行時期は不明となつていた。「三四年前」とあるためで、昭和九年から三、四年前に適当な柳田の旅行記録がない（柳田二〇〇二 五六〇）。しかし、これは、柳田の記憶違いか記者のミスとすべきだろう。信頼できない部分もあるわけだが、「丹波市記」と「高見山近傍の口碑」の間の旅程がわかる点で有益な文章である。

（四）大正五年四月の関西旅行

以上に記した「丹波市記」「高見山近傍の口碑」「旅行の上手下手」から、大正五年（一九一六）四月初旬の関西旅行の全体が再構成できる。また、最近、柳田の絵葉書が出版されたが（田中二〇〇五）、この旅のものも収録され、やや詳しい足取りが明らかになつた。⁽⁴⁾これらから旅行を復元すると次の通り。

まず大正五年四月二日に奈良につき、翌三日に公務の畠傍山陵・橿原神宮参拝を済ませる。その後、畠傍山陵・橿原神宮—今井・八木—十市—箸中—柳本—大和神社—丹波市（天理）—奈良というように奈良盆地を北上し、夜、奈良のホテルで一泊。翌四日、大和郡山に行き、大和郡山—当麻寺—河内長野。河内長野は五日に一泊。翌六日、河内長野—観心寺—千早城址—五条で一泊。七日、五条—鷺家口—杉谷とたどり、高見峠を越え、波瀬に下り、松坂に出た。

この旅行は、柳田の山争い伝説の研究に大きな影響を与えた。「高見山近傍の口碑」にあるように、柳田は「高見山の入鹿の首塚」の原型となる地元の伝承を聞き、さつそく翌月の『郷土研究』に報告、解釈の発想を得る。さらに大正七年の論文「橋姫」では、十分資料を示さないまま「大和と伊勢の国境の高見山に、蘇我入鹿の首が飛んで来て神に祭つたと云ふ言伝へ」は、「明白に山の争が神の争となつた一つの証拠」とまで断定する（柳田一九九八 b 四九〇）。こうした解釈が昭和四年（一九二九）の『日本神話伝説集』で展開される。

また、「高見山近傍の口碑」では、高見山が勇ましく見えるのは「五条下市間」であり、山争いを言い始めたのはこの辺の住民かとも記している。その当否はともかく、こうした推察は、まさにそこを通過した柳田の実感に裏打ちされている。

これに関して注目されるのは、柳田は、万葉集の「大和三山の妻争い」の物語も、山争い伝説の一種とみなしていたことである。『日本神話伝説集』では、この大和三山の物語にふれた後、類話として、岩手山と早池峰山は姫神山を取り合つて仲が悪い、あるいは姫神山を憎んだ岩手山が別の山の首を切つたという伝説を並べている（柳田一九九八 a 四一四—四一五）。そして、大和三山と高見山について、昭和五年（一九三〇）に柳田は次のような文章を記しているのである。

話頭は常に山を望む人々によつて提起せられたのみなら

ず、恐らくは同時に双方の山を望み得るやうな地点に於て、

高さ競べや妻争ひの物語は、夢み始められたと思はれるのである。大和の三山は布留纏向の東の高みから、殊に夕の空が其輪郭を際立たせ、又は川霧の上に峰ばかり浮かんで見えた時に、最もその伝説の印象が鮮やかであつたろう。今日行はれて居る多武峰と高見山の高さ比べなどは、それからずつと南の、紀の川中流の村里まで行かぬと、あゝいふ空想は抱かれさうにも無い故に、後になつて追々發達したのである（柳田一九九八c 二六〇～二六一）。

文中の「布留纏向」は、大正五年四月の旅行で通過した場所である。奈良盆地東部の山麓を桜井から天理に向かう所で、「最も古い帝都の多く有つたのは此辺の傾斜地で、此から見ると葛城山脈の入日の景色が、二千年の昔もさぞ花やかであつたろう」と柳田は「丹波市記」に記している。この場所から葛城山脈の方角を見ると大和三山が見える。柳田の目には、その輪郭が映つていたことだろう。

一、記述の相違と地元の伝説

(一) 不完全な報告

大正五年（一九一六）四月の旅行は山争い伝説について収穫の多い旅行だった。が、その最初の報告「高見山近傍の口碑」

の記述には、実は問題が含まれている。

というのは、『日本神話伝説集』に記され、「高見山の入鹿の首塚」の原型に位置づけられた「土地の人の話」の方は「山争い」の話型によく一致している。その一方、「高見山近傍の口碑」に記された「荷持ちの男」の話は、これに比べて不完全に見える。さらに、現地で柳田のルートを確認すると、つじつまのあわない点もでてくるのである。

まず、『日本神話伝説集』（以下「日本」）と「高見山近傍の口碑」（以下「高見山」）の伝説の記述を比べよう。

『日本』に記された伝説は、「峠路の脇に、二丈もあるかと思ふ大岩が一つあります。土地の人の話では、昔この山が多武峰と喧嘩をして負けた時に、山の頭が飛んでこゝに落ちた」である。一方、「高見山」に記された話は、「（多武峰と敵同士の）高見様は荒い神様で、首を切られて其首が此山の上迄飛んで騰った」となっている。

『日本』に比べると「高見山」では、①落下した頭だという岩への言及がない。また、②頭が山の上に飛び上がつたが、落ちたとは記されていない。

この、①落下した頭だという岩だが、『日本』では、「峠路の脇の二丈位の大岩」とあるだけで、名称は記されていない。因みに「旅の上手下手」（以下「旅の」）もこの岩に言及するが、やはり名称はない。一方、「高見山」では、小石を積まないと動くという「搖ぎ石」を、「山争い」の直前に紹介している。

石の場所は、峠道の路傍で登山口付近という。素直に考えると、これが落した頭だと考えたくなるが、そうは明言されていない。これはどういうことだろうか。やや遠回りになるが、当時、高見山の頭が落下して「搖き石」になったという地元の伝承がありえたかどうか、考えてみよう。

〈表一〉に周辺の高見山の伝説をまとめた。これを見ると、「搖き石」が落下した頭だという伝説そのものは見当たらない。ただし、「搖岩」について、「多武峰・大職冠・藤原鎌足公」と唱えると揺れ出したという伝説がある〔DⅢ〕。

揺れるのは怒ったためと解釈でき、「搖岩」も多武峰や鎌足と対立しているという観念がうかがえる。つまり、高見山と同じ性格の存在、分身というわけである。また、一般的にいつて、伝説では、対象物の特性について、しばしば誕生時の特別な事情で由来を説こうとする。つまり、多武峰・鎌足と対立する「搖岩」の由来譚として、この世に岩を存在させた、特殊な出来事を語る伝説があつたと考えられる。こうした対立をもたらすような出来事といえば、なんらかの「争い」とみるのが適当だ。

このように、かつては「多武峰と高見山が争つた結果、搖岩ができた。そのため搖岩は多武峰・鎌足を恨んで揺れる」という趣旨の伝説が地元にあつたと認められる。この伝説を柳田の報告と重ねあわせると、「多武峰と高見山が争い、高見山の頭が切られて飛んだ。そのため搖岩ができた。それで搖岩は、多武峰・鎌足を恨んで揺れる」という伝説が得られる。この「搖岩」

は高見山にあるのだから「頭が飛んで、できた」のなら、「頭は高見山に落ちた」と展開するのが自然である。

なお、各地には、争いに負けた山を慰めるため石を積んだという伝説がある。これを媒介にして考えると、石を「搖き石」に積んで動きを静めるという伝承も「山争い」との関連が認められる。また、「搖岩」は、高見山に大力を祈願した五郎宗という男が運んだという伝説もある〔DⅣ〕。「山争い」や「高見山の入鹿の首塚」とは別系統の伝説だが、それでも、「搖岩」はもともと当地にあつた岩ではないという、共通の観念がうかがえる。

このように、大正五年に柳田が話を聞いた際、地元にあつたと推定できる伝説、「多武峰と高見山が争つて高見山の頭が切られ、落ちて搖岩になつた」という趣旨の伝説が復元できたわけである。では、なぜ、柳田の「高見山」の報告は、一部を欠くものになつたのだろうか。これは、②の問題、つまり、頭が山の上に飛び上がりたが、落ちたとは記されていないという問題と関係している。実は、文章だけでは気づかないが、柳田は「搖き石」を見ていない。それどころか岩の傍すら通つていない。柳田が通つた道は、高見越の伊勢街道（伊勢側では和歌山街道）だが、高見山の西尾根の南側を横切るように登つて峠に出る。街道は山腹をたどり、途中で尾根や山頂に出ることはない。一方、「搖岩」は高見山の西の尾根上にある（地図一）。岩を見るなら登山道に入らなければならないが、わざわざそしたとは柳田は書いていない。

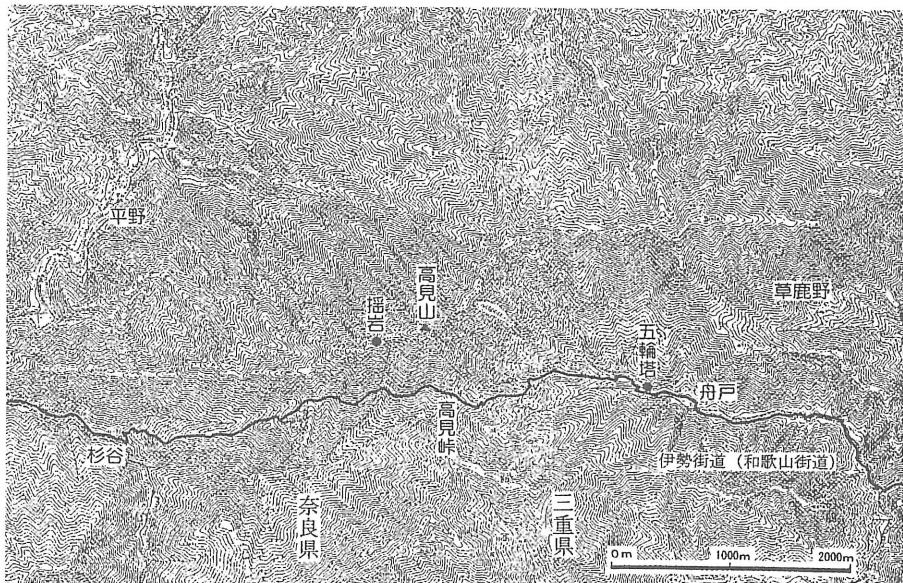
E. 五輪塔 (三重・舟戸)	F. 高見山の祭祀	G. 精験・禁忌・祟り	H. その他
	<p>[F I] 高見山に入鹿を祀る *付記中に。</p>	<p>[G I] 高見山に参ったら多武峰に参るな。 [G VI] 首から上の病に精験。 [G VII] 力に精験。平野(東吉野村)の弥五惣が力を授かった。</p>	<p>[H I] 4月8日・8月15日が参詣日。</p>
	<p>[F I] 高見山に入鹿を祀る *「即事考」①などによる。</p>	<p>[G III] 高見山で多武峰の話をしてもいいけない。 [G V] 高見山で鎌を使うな(使うと怪我・山鳴)。 *「即事考」①による。</p>	
	<p>[F IV] 高見山の頭は大和、胴は伊勢にある。</p>		
<p>[E I] 入鹿の首塚。^{③⑯}</p> <p>[E II] 入鹿の塚・墓。^{⑭⑯⑰}</p> <p>[E III] 入鹿か平家落人の墓。^⑮</p>	<p>[F I] 高見山に入鹿を祀る。 ①②④⑤⑬⑯⑰</p> <p>[F II] 高見山に入鹿の首を祀る。^⑥</p> <p>[F III] 舟戸の五輪塔は入鹿の首塚、高見山頂の高見明神は入鹿の墓を祀る。^③</p> <p>[F V] 高見山東山腹の草鹿野の雨乞い場「雨の宮」は入鹿の墓か。草鹿野(そうがの)は蘇我からついたとも。^⑯</p>	<p>[G I] 高見山に参ったら多武峰に参るな。^⑥</p> <p>[G II] 高見山に参って多武峰に参ると腹痛。^⑤</p> <p>[G IV] 高見山で鎌足を讃称するとき山鳴。^②</p> <p>[G V] 高見山で鎌を使うな(使うと怪我・山鳴など)。^{①⑤⑥⑧⑯⑰⑯}</p> <p>[G VI] 首から上の病に精験。^{⑤⑥⑯}</p>	<p>[H II] 8月15日夜に登山。^⑤</p> <p>[H III] 卯月八日(4月8日)は入鹿に花を捧げる日。^⑯</p> <p>[H IV] 舟戸の五輪塔付近に「能化庵」(明治5年廃寺)。開基で、入鹿の妻・娘・家臣だという位牌が伝わっていた。表面は「当山開基/心月院殿貞光雲盛大法尼/瑞容(雲とも)院殿忠玉恵玉(匠とも)大法尼/臣熊沢權之進建之」。裏面は「心白鳳九年九(七とも)月七日入鹿妻室/瑞大宝二年二月二十九日入鹿姫君/法名元法空心阿闍梨」。^{⑯⑰}</p>

⑪『東吉野村史』通史編(東吉野村史編纂委員会 1992 624頁) ⑫『東吉野の民話』(竹原・丸山 1992 5~8頁、12頁 高見地区 明治30~大正5年生) ⑬『曾爾村史』(曾爾村史編集委員会 1972 603頁、652~653頁) ⑭『曾爾村史』(曾爾村史編集委員会 1972 767頁) ⑮『飯南郡史』(中林 1916 468頁、505頁) ⑯『史蹟名勝天然紀念物調査書(飯南・多気・度会・志摩)』(三重県 1937 5頁) ⑰『飯高町』(雀部 1956 77~78頁) ⑱『飯高町郷土誌』(飯高町郷土誌編纂委員会 1986 1148頁) ⑲『飯高町郷土誌』(飯高町郷土誌編纂委員会 1986 1148~1149頁)

〈表1〉高見山の伝承

		A. 対立者	B. 競争	C. 頭の飛行・落下	D. 摺石(搖岩)・落下した頭(奈良・高見山西尾根上)
	「高見山近傍の口碑」1916(柳田 2000b 65 頁)	[A I] 高見山・多武峰	[B I] 争い(不特定) *「敵同土」	[C I] 高見山は荒い神様で、切られた首が山の上まで飛び上がった。	[D I] 石を積まないと動くという大岩「搖ぎ石」。 *この岩が「落下した頭」だという記載はない。 *高見峠路傍、登山口付近というが、実際の「搖岩」は高見山西尾根上。
柳田國男の記述	『日本神話伝説集』1929(柳田 1998a 426 頁)	[A I] 高見山・多武峰	[B I] 争い(不特定) *「喧嘩」	[C II] 高見山が負け、頭が飛び、山中の大岩の所へ落ちた。 *「首が切られた」との記載なし。	[D II] 落下した頭だという大岩。 *「搖ぎ石」の名称記載なし。 *高見峠路傍というが、実際にこのような大岩はない。 *「搖岩」だとすると、高見山西尾根上。 *「二丈もあるか」
	「旅行の上手下手」1934(柳田 2002 185 頁)	[A I] 高見山・多武峰	[B II] 背比べ	[C II] 高見山が負け、頭が飛び、山中の大岩の所へ落ちた。 *「口惜しくて頭を飛ばした」という。	[D II] 落下した頭だという大岩。 *「搖ぎ石」の名称記載なし。 *高見峠路傍というが、実際にこのような大岩はない。 *「搖岩」だとすると、高見山西尾根上。 *「一丈位」
近世・近現代の高見山の伝説	近世地誌・隨筆・日記①②③④ 高見山西麓・奈良県吉野郡東吉野村での報告⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫ 高見山北麓・奈良県宇陀郡曾爾村での報告⑬⑭ 高見山東麓・三重県松阪市飯高町での報告⑮⑯⑰⑱⑲	[A II] 入鹿・鎌足①②⑤⑥⑨⑦⑧⑬⑭⑯⑰⑱⑲ [B III] 鎌足の多武峰より高所に祀るよう入鹿がお告げ。①②⑤⑥⑦⑧⑬⑭⑯⑰⑱⑲ [B IV] 入鹿は百姓を大変かわいがり、死後高所に祀られることを希望。⑬	[C III] 切られた入鹿の首が飛び高見山に落ちた。⑤⑥⑦⑧ [C IV] 入鹿の首が飛び高見山東山腹の草鹿野(そうがの・飯高町旧波瀬村)に落ちた。それで「蘇我」から草鹿野とついた。⑨ [C V] 高見山上に逃げ込んだ入鹿の首を鎌足が切り、足で蹴ったので、舟戸(飯高町旧波瀬村)へ飛んで行った。⑭ [C VI] 鎌足は竹にくくった鎌で入鹿の首を切った。首は「首の病を治す」といって飛んだ。卯月八日(4月8日)は入鹿に花を捧げる日で、竹竿に花をつけ鎌を添えて立てる。⑬	[D III] 摆岩に「多武峰大職冠藤原鎌足公」と三度唱えると搖るぎ出した。⑪ [D IV] 「五郎宗岩」「搖岩」という不安定な大岩。高見山に大力の願掛けをした山麓の平野(東吉野村)の田中五郎宗が持ち上げて置いた。⑩⑫	

- ①『即事考』1821(竹尾 1916 294~295 頁) ②『南勢雑記』1822(常誉・山田・野呂 1975 92 頁)
 ③『高野及熊野紀行』1830(竹川 1985 215 頁) ④『勢羽五鈴遺響』1833(安岡・倉田 1978 22~23 頁)
 ⑤『大正四年 吉野郡高見村風俗誌』1915(東吉野村史編纂委員会 1990 1138 頁、1167~1168 頁) ⑥『東吉野の民話』(竹原・丸山 1992 49~50 頁 小栗柄 大正 15 生) ⑦『東吉野の民話』(竹原・丸山 1992 51 頁 小栗柄 大正 7 生) ⑧『東吉野の民話』(竹原・丸山 1992 52~53 頁 萩原 明治 40 生) ⑨『東吉野の民話』(竹原・丸山 1992 54 頁 杉谷 大正 7 生) ⑩『大和の傳説』(奈良県童話聯盟・高田 1933 197~198 頁 東吉野村高見地区)



〈地図1〉高見山近傍 [2万分の1地形図「高見山」「波瀬村」明治25年(1892)測量 大日本帝国陸地測量部より。部分・加筆・縮小]

柳田は、「高見峠の路の傍のちやうど高見山の登り口に近い處に、大きな岩があつて無数の小石が其上に載つて居る」と「搖ぎ石」描写している。だが、これは柳田が実見したものではなく、伝説と同様、荷持ちの男から、岩よりすつと下の道をたどりながら聞いた話なのである。

岩の位置が違うのは、柳田の誤解のためだろう。伝説を語る地元の男が位置を知らないとは考えにくく、おそらく「峠道の上、頂上に登つていく所」などという男の言葉を柳田が誤って理解したのである。男は「至つて実体さうな男」で「話の多い男」という。どのような話者が判断しにくいが、話し手は、話がはずむほど、自己の周知の事柄について聞き手への配慮を忘れがちである。調査経験を振り返ればわかるように、話者が文章のように整然と話をすることはまずない。まして移動しながらの聞き取りである。尋ねても腑に落ちない点は残つただろう。そうした記憶を再構成し、柳田は報告したのである。もちろん、今では得られない貴重な資料だが、記述どおり受け取れない点もある。他の資料ともつきあわせ、当時の伝承を判断しなければいけない。

また、こうした状況を前提に考えると、かえつて解決のつくり問題がある。先の①、つまり、頭が山の上に飛び上がったが、落ちたと明記されていない点である。

〈表一〉の「C. 頭の飛行・落下」を一覧すると、頭が飛んだと伝える伝説では、高見山かその付近に落ちたというものがほ

とんどである。大正四年当時の地元の伝説も「多武峰と争つた」

高見山の頭が切られ、落ちて搖石になつた」というものだつた。

男は、こうした伝説を道々語つたと考へられる。そして、先に指摘したように、「搖石」は道より上の尾根にある。つまり、

頭が落ちた所は、柳田が話を聞いた場所より上に位置するのである。こうした位置関係にあれば、「頭が山の上に飛び上がつた」という表現が男の口から出ても変ではない（頭の元の位置を考えるなら「飛び乗つた」という方が正確だが）。つまり、ここで柳田はほぼ「桶屋の話した通り」に書いたのである。

柳田は、こうした表現から、頭は道より上の高見山のどこかに落ちたと理解したはずである。本来「搖石・搖ぎ石」のつもりで話されていたのだから、柳田は「搖石」と同じような場所、すなわち峠道からあまり遠くない所と見当をつけただろう（ただし、これも間違つて理解しているのだが）。山の頭というから、どうやら岩塊らしいこともわかる。ただ、それが例の「搖ぎ石」だとは理解できなかつた。どちらの位置も「話」でしか聞いておらず、具体的な場所は不明だつたからである。

「高見山近傍の口碑」を読み返すと、「搖ぎ石」の伝承の後に高見山と多武峰が争う話が記されている。荷持ちの男は「搖ぎ石」の話の続きとして、石の由来譚である「山争い」を語つたにちがいない。柳田はそれが十分飲み込めず、結局、別の話のように記載したわけである。

(二) 記述の変化—補正にみる柳田の手法—

以上のほか、「高見山」から一三年後の『日本』、また一八年後の「旅の」で記述が異なる部分がある。以下も、〈表一〉を参照されたい。

まず『日本』では、「高見山が負けた」と明記する一方、「首が切られた」とは記さなくなつた〔C II〕。「旅の」では、「高見山」『日本』で明確でなかつた山争いの内容が、「背比べ」と特定されるようになつた〔B II〕。また、「首が切られた」のではなく、「口惜しくて頭を飛ばした」となつてゐる〔C II〕。さらに「高見山の頭は大和、胴は伊勢にある」ともいう〔F IV〕。なお、両者とも岩の大きさを記すようになつたが、「日本」と「旅の」とで食い違う。もともと岩を見ていないのだからしかたがない。単に「大きい」という程度の形容だろう。

概して「旅の」での変化の方が激しい。文責者でないのでやむをえないが、実は「背比べ」については、地元にそれらしい伝承がある。〈表二〉の〔B III・B IV〕だが、文政四年（一八二二）『即事考』（表一①）や同五年『南勢雜記』（同②）には、多武峰より高所に入鹿を祀れとのお告げがあつた、そういう神託があつたのではないかという記述がある。『即事考』は『日本』で柳田も参照しており、こうした情報から、地元の伝承を推測し、具体的に「背比べ」と改めたものだらう。

その次の相違点、「口惜しくて首を飛ばした」の方は問題が大きい。この表現は、最初の「高見山」の記載と矛盾する。

しかも、「これは『高見山』や『日本』で紹介していた、鳥海山の頭が飛んだという伝説にあつた表現である。つまり、柳田は他地域の伝説と混同したのである。

こうした混同から、柳田が鳥海山の伝説に強い印象を受け続けていたことがわかる。これを敷衍すると、柳田は、ある地域の伝説を考える場合、常に他地域の類話を思い浮かべていたということになる。柳田は、このよつた類話で得られる類型から、情報の価値を探り当てた。たとえば、「高見山」の時点では、男の話を十分理解できず、価値も確信できないまま「落下した頭が岩になる」と言う部分の明記を欠いて報告した。それが「日本」では「山争い」として整つた記載に変化する。かつての情報の要素・構図が見直されたわけだが、それを可能にした思考の道具が話型である。つまり、「日本」までに集積した類話で、「争いの結果、山の一部が飛び、付近に特徴ある地形ができる」という話型が確認され、その結果、理解が曖昧だった話者の話から、「落下した頭が岩になる」という要素が浮かび上がつたのである（ただし、まだ「搖石」と認めていないのである）。

ここには、柳田の手法がよくあらわれている。すなわち、類型に対する強い信頼があり、比較によつて潜在する要素を予測、確信、考察を進める。場合によつては類型に基づいて報告を補正するのもためらわないのである。

もう一つの相違点、「高見山の頭は大和、胴は伊勢にある」

という表現については、類似表現が近世の旅日記「高野及熊野紀行」（表一③）に見られる。場所に入れ替わっているが、高見山頂の社は入鹿の胴、伊勢側の舟戸の五輪塔は首だという伝説である〔FIII〕。ただし、この伝承が柳田に影響したわけではないようだ。（表一）からわかるように、頭の落下地を特定する場合、大和側では「搖石」、伊勢側では舟戸や草鹿野など、複数の伝承がある。それら頭の方の伝承にもとづいて山頂の祭祀対象を推し量ると、頭に対する胴という発想が出てくる。柳田もこのようにして「胴は伊勢にある」としたものだろう。

なお（表一）を見ると、高見山の伝説には、柳田が扱わなかつた興味深い要素がいくつかある。それによると、入鹿や高見山が、天神や水神・農耕神の性格を持つことがうかがえるのだが、この点は稿を改めたい。

三、高木敏雄『日本傳説集』の影響

（一）『日本傳説集』への言及

「高見山近傍の口碑」末尾に、「山争ひの話は高木文学士の日本傳説集にも幾つか採録せられて居る」という記述がある。旅行の三年前、大正二年（一九一三）に高木敏雄が刊行した『日本傳説集』のことである。同書には「巨人傳説及兩岳背競傳説第一」という大項目があり、その中の「（乙）兩岳背競傳説」の小項目に山争い伝説の類話を収まつてゐる。

同書の「内容分類總目次」を見ると、各類話に「夷服淺井式傳説」などの話型名や「首刎ねモーチーフ」といった要素名が記されている（高木一九一三二七八）。高木の「解説」によると、「夷服淺井式傳説」とは「山と山とが高さを争つて、一方の山が高さに負けて、相手の頸を打ち落としたと云ふ形式の話」（高木一九一三二九五〇二九六）で、いわゆる「近江國風土記逸文」の夷服岳・淺井岳の伝説に名称が由来する（柳田『日本神話伝説集』では肝吹山と淺井の岡の話）。

柳田はこれらを参照して、いたわけだが、『日本傳説集』の分類には便宜的な所があり、他項目にも「山争い」と見てよい類話がある。たとえば、「説明神話的傳説 第一」の「(ハ) 岩手山」だが、これと同じ山が登場する類話が「妻争傳説 第十四」の「(ロ) 早池峯岩手山姫神岳」に収められている。

興味深いことに、この「(ロ) 早池峯岩手山姫神岳」に「大和三山式妻争傳説」という注記がある（高木一九一三二八五）。柳田は『日本神話伝説集』で、岩手山・姫神山などの類話をあげつつ、大和三山物語を「山争い」に含めていた。この類話の出典を「高木氏の日本伝説集」としているのだが（柳田一九九八a四一四）、単に類話だけでなく、分類や原型に関する発想の淵源も『日本傳説集』にあつたのである。柳田は、同書を一通り読んだだけでなく、題名や話型・モーチーフなどの注記を活用して、各伝説間の連関を縦横にたどっていた。

(二) 「高見山の入鹿の首塚」の解釈の源流
『日本伝説集』は、「高見山の入鹿の首塚」の伝説も収める。「(ヲ) 大和國の山々」という題名で、奈良県北葛城郡河合からの、次のような報告である。内容は次の通り。

高見山と多武峯との喧嘩は、昔、蘇我入鹿といふ大臣が、悪いことをしたので、忠義者の藤原鎌足が入鹿を殺した。すると、殺された入鹿の首が、高見山へ飛んだ。その後、鎌足は多武峯に祀られる事になつたので、高見山は日頃の恨みと、何時も多武峯を睨んでいる（高木一九一三三二）。

この伝説は、「巨人傳説及兩岳背競傳説 第一」という大項目ではあるが、「(乙) 兩岳背競傳説」ではなく、「(甲) 太太法師傳説」の方に分類されている。同じ報告者からの資料をまとめて掲載したためで、「大和國の山々」には、上記の伝説以外、生駒山の石が奈良へ行きたがる話、また、弁慶が畠傍山・耳成山を担いだ話の一話が含まれている。後者はたしかに巨人伝説・ダイダラボッチ伝説に分類すべき話である。

ただし、「(ヲ) 大和國の山々」は、「(甲) 太太法師傳説」の最後、つまり、「(乙) 兩岳背競傳説」の直前に配列されている。これは偶然でなく、高木は「高見山の入鹿の首塚」に「山争い」と共通の要素を認めていた。「(ヲ) 大和國の山々」の注記には、「夷服淺井式傳説」「變則首刎モーチーフ」という指摘があり、

それがよくわかる⁽⁵⁾。このように、柳田の「高見山の入鹿の首塚」の解釈の源流も、『日本傳説集』にあつたのである。

おわりに

大正五年（一九一六）頃、柳田は『日本傳説集』を熟読し、発想を汲み取り、資料の連関をたどっていた。同書に触発された思考は同年の旅行経験と響きあい、「高見山近傍の口碑」になり、『日本神話伝説集』の解釈になつた。伝説研究の系譜を認識するため、今後も柳田の読み直しと、高木の業績・影響の丁寧な検討が必要である。⁽⁶⁾

注

（1）話型名は「高見山近傍の口碑」中の言葉。『日本傳説大系』

別巻一「日本伝説大系話型要約」の「一八一 山の争い」、

すなわち「山と山とがお互いに争つて物を投げあい、そのためには景観がかわる」という話型に相当（荒木・野村・

福田・宮田・渡邊一九九〇 一三五）。ただし、山頂（頭）が切られたり、蹴られたり、怒つて飛ばしたという展開もあり、「山の一部が飛び、付近に特徴ある地形ができる」と広くとらえる方が適切と考へる。

（2）柳田以後、関敬吾「山と伝説」（関一九八一）、高橋文太郎「山の伝説」（高橋一九四三）、岩科小一郎「山と山とが争つ

た話」（岩科一九六八）などがあるが、柳田を大きく超えるものはない。『日本昔話事典』（一九七七）、『日本伝奇伝説大事典』（一九八七）、『昔話・伝説小事典』（一九八七）、『日本民俗大辞典』（二〇〇〇）など現行の事典類も同様。

（3）話型名は『東吉野の民話』（竹原・丸山一九九二）。

（4）大正五年四月二日の奈良ホテルの絵葉書に「明日は郡山城に招かれる、六日の絵葉書に、『昨日、河内長野に一泊。今日、金剛山南を越えて五条に入る。』とある（田中二〇〇五四三～四五）。

（5）「大太法師傳説」と「兩岳背競傳説」を「巨人傳説及兩岳背競傳説」に括する高木の発想も要検討。

（6）近年、鈴木寛之が検討を始めた（鈴木二〇〇四）。

参考文献

荒木博之・野村純一・福田晃・宮田登・渡邊昭五『日本傳説大系』

別巻一 一九九〇 みづうみ書房

飯高町郷土誌編纂委員会『飯高町郷土誌』一九八六 三重県飯

南郡飯高町

岩科小一郎『山の民俗』一九六八 岩崎美術社

雀部竹風『飯高町』一九五六 香肌峠タイムス社

常誉撰門著・山田勘藏補記・野呂修三校訂『南勢雑記』

一九七五（一八二三成） 三重県郷土資料刊行会

- 鈴木寛之「『郷土研究』創刊号と高木敏雄」『文学部論叢』八
 二〇〇四 熊本大学文学部
- 関敬吾「山と伝説」『関敬吾著作集』三 曾爾村史編集委員会
 一九八一（初出一九四三）同朋舎
- 曾爾村史編集委員会『曾爾村史』一九七二 曾爾村役場
- 高木敏雄『日本傳説集』一九一三 郷土研究社
- 高橋文太郎『山と人と生活』一九四三 金星社
- 竹尾覚齋「即事考」国書刊行会『鼠璞十種』一 一九一六
 （一八二二成）国書刊行会
- 竹川正信「高野及熊野紀行」三重県教育委員会「初瀬街道・伊勢本街道・和歌山街道―歴史の道調査報告書」一九八五
 （一八二〇成）三重県教育委員会
- 竹原威滋・丸山顯徳『東吉野の民話』一九九二 東吉野村教育委員会
- 田中正明『柳田國男の絵葉書』二〇〇五 晶文社
- 中林正三『飯南郡史』一九一六 飯南ト人材編纂会
- 奈良県童話聯盟・高田十郎『大和の傳説』一九三三 大和史蹟研究会
- 東吉野村史編纂委員会『東吉野村史』史料編 下 一九九〇
 東吉野村教育委員会
- 三重県『史蹟名勝天然紀念物調査書（飯南・多氣・度会・志摩）』
 一九三七（三重県立図書館蔵）*刊行年不明。年次は収書印。
-
- 安岡親毅著・倉田正邦校訂『勢陽五鉢遺響』四 一九七八
 （一八三三成）三重県郷土資料刊行会
- 柳田國男「日本神話伝説集」「柳田國男全集』四 一九九八a（初出一九二九）筑摩書房
- 柳田國男著「橋姫／一日小僧その他」「柳田國男全集』七 一九九八b（初出一九一八）筑摩書房
- 柳田國男著「序跋集・青木純二著『山の伝説』／退読書歴」「柳田國男全集』七 一九九八c（初出一九三〇）筑摩書房
- 柳田國男著「丹波市記」「柳田國男全集』二五 二〇〇〇a（初出一九一六）筑摩書房
- 柳田國男著「高見山近傍の口碑」「柳田國男全集』二五 二〇〇〇b（初出一九一六）筑摩書房
- 柳田國男著「旅行の上手下手」「柳田國男全集』二九 二〇〇一（初出一九三四）筑摩書房
- （さいとう・じゅん／天理大学）